日本文学のなかへ

ドナルド・キーン

文藝春秋

著者紹介

1922年、ニューヨークに生まれる。コロンビア大学で仏文学、戦後、同大学大学院で東洋文学を専攻。1948年から5年間、英国ケンブリッジ大学で日本文学を研究。1953年、京都大学（大学院）に留学。現在、コロンビア大学教授。専攻、日本学（日本文学・文化史）。著書に『日本人の西洋発見』『日本の作家』『日本との出会い』（いずれも中央公論社）『日本を理解するまで』（新潮社）ほか。訳書に『近松英訳集』『人間失格』『宴のあと』など多数。目下、厖大な日本文学史を執筆中。

日本文学のなかへ

昭和五十四年九月三十日　第一刷

一〇〇〇円

著者　ドナルド・キーン

発行者　半藤一利

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三番地
電話　東京（二六五）一二一一
郵便番号　一〇二

本文印刷　理想社
付物印刷　共同印刷
製本　加藤製本

＊万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Donald Keene 1979

Printed in Japan

目次

一　サクラガサイタ……5
二　日本への開眼……39
三　奇人・ウェーリー先生……77
四　わが心の三島、谷崎……105
五　訳す・読む・話す……137
六　国文学者として……159
七　終りのないライフ・ワーク……189
あとがき……224

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装幀　坂田政則
口絵写真　安藤幹久

日本文学のなかへ

一　サクラガサイタ

もし私がフランス文学の研究者であったなら、フランス人はだれ一人として不思議な顔をしなかったに違いない。だが、アメリカ人として日本文学を勉強してきた私に、初対面の日本人がもっとも多く発する問いは「なぜ日本文学を学ぶようになったか」である。日本人は、それほど日本文学を特殊なものと考えたがる傾きがあるのだが、またそれほど「出会い」というものを大切にしたいのだろう。

しかし、出会いは、偶然の積み重ねによって起るのが大多数の例だし、私の場合も例外ではなかった。偶然のことに中学時代の私のクラスには日本人の少女がいたし、のちに日本語を習ってみませんかと誘われたのも偶然だった。めぐり会いの最初の一瞬をつきとめるのは、それほど意

味のあることではないし、また私は、それをすでに『日本との出会い』（中央公論社）の中で書いたし、何度かの講演でも話している。ここでは、コロンビア大学に入学したときのことから書いてみたい。

一九三八年九月だった。独伊英仏の間にミュンヘン条約が成立した月である。ヒトラーを懐柔しようとした連合国側の目算ははずれ、やがて一年後、独軍のポーランド侵攻によって第二次世界大戦の幕が切って落とされる。私は、そのような大戦前夜の雰囲気の中で高校を終了した。折りから時代の風雲を象徴するような台風がニューヨークを襲い、コロンビア大学の入学式に出た私たち新入生はずぶ濡れになったのを覚えている。

そのころの私は、高校時代に教わった女性の教師から強い影響を受けていた。

一風変った教育観の持主で、彼女は、いまの言葉で言えば、英才教育をやっていた。自分が学者になれなかったため、生徒を仕込むことによって代償満足をねらったわけで、毎年一人ずつクラスの中から生徒を択んで、自分の理想を吹き込んでいた。私の前の二人は、いずれも理科系の男の生徒で、非常に頭がよかった。三年目にして私がはじめて文学の道へ、彼女の夢を担いつつ進む役割を与えられたのである。

文学を知るには、外国語を学ばねばならない。ギリシア語、ラテン語、フランス語、ドイツ語

は、アメリカ人の教養にとっても必須である。――彼女は、そう信じていた。そのような考えは、おそらく、コロンビア大学での私の師となったマーク・バン＝ドーレン先生から習ったのだろう。あのころは、高校の教師でも、コロンビアの大学院で講義を聞いている人がいたからである。

いわゆる教養主義の教育だが、当時の米国には、メリーランド州にセントジョンズ・カレッジという小さい大学があって、現に一年ではギリシア語、二年ではラテン語という教育をし、グレート・ブックスと呼ばれるような古典を原典で読ませていた。広い意味のリベラル・エジュケーションの範疇に入るのだが、そのリベラルは「自由な」ではなく「人を自由にするための」の意だと説明されていた。人間は、自由になるためには過去のことを知らねばならない。自分の前に人間が歩いてきた道を知らねば自由になりえない。……そういう考えかたが、一時的ではあったが流行していたのだ。

歴史を学ぶにも現代の歴史学者の著を読まず、ギボンを読んでローマの歴史を知るといった具合で、その意味では教養主義であるとともに古典主義の教育ともいえる。ただし自然科学でも、ニュートンやファラデーのような偉大な科学者だけを読み、新しい科学の進歩には無縁だった。専門科目の最先端をどこまで進めるかは問題でなく、自由な人間になるのが目的なのだから、それでよかったのである。

私はメリーランドの、その小さい大学へ行きたかったのだが、コロンビア大学でも一年生にだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

けは同じ教育法を用い、ホメロスからゲーテまでを（ただし英訳で）一般教養として教えているのを知った。

高校生の私は、フランス語は出来たので、フランス文学だけは原典を読んだが、大学に入ると一年目から英訳ながら毎週二、三冊の割で古典を読むよう指導された。苦しかったが、すばらしい経験だった。ただし私は、高校時代からの特殊教育のおかげで、大学入試の面接のとき、最近読んだ本を書けというので書いたら、「大学生の読む本をみな読んでいる」と、試験官が驚いた。ギリシア悲劇やダンテは、高校生にして読了していたのである。

現在もそうだが、私が入学する一年前までのコロンビア大学も、学生は専門以外のものをほとんど読まなかった。だが、一時的ではあったが当時の理想として、真の人間は世界の市民であり、広い視野で各国の文学を読んで、その上に自分の理想を築くのだという考えかたが採用されていた。そして世界文学は、私にとって、まるで新しい発見のようだった。バン＝ドーレン先生には *Anthology of World Poetry* という本があり、その中には独仏の詩は言うまでもなく中国の詩や『万葉集』までが収められていた。

このような教養主義の教育に着手したのは、米国ではコロンビア大学が一番早く、それだけに意気込みも違っていた。偉い先生は、ふつう大学院か四年生しか教えないものだが、あのころはすすんで一年生を教えた。実力のある先生を囲む学生も、一クラスが十五人くらいだったから、

教師との個人的な触れあいがあった。

バン＝ドーレン先生との出会いは、私にとっては決定的なもので、現在の私の講義は（先生ほど上手ではないが）先生の講義をモデルにしている。書いた原稿を朗読せず、考えながら話す方式である。

講義の草稿がないと、場合によっては、言わなくても言いようなことを言ったり、言葉が多すぎることもある。そのかわり内容は新鮮で、十年、二十年の昔に書いた原稿とは違う。十年前の講義ノートに基づき、文字通り十年一日の如く適当なところで適当な冗談やゼスチャーをはさむ先生は、どの大学にもいる。そのような講義は、本にして発表したほうがいいのであって、講義の目的は知識を伝えることにはない。そのときまでに感じなかったこと、つまり主観的な文学の鑑賞を伝達することにこそ講義の存在理由があると、私は信じている。ときには、それまでに感じていたことでも、しゃべっているうちに別の角度から話すことがある。

学生が生きた学者と同じ部屋にいる、死んだ原稿ではなく生きた思考を伝達されている、というのが大切なのだから、講義というのは演劇と変らない。ただ、演劇ではセリフが決まっているが、講義は必ずしもそうはいかない。いわば即興演劇である。

私が大学に進んだころの日本は、すでに中国大陸で戦線を拡大中だった。ただ、米国の参戦は、

一九三八年の時点では、まだ夢想もできないことだった。高校生の私も、「第一次大戦では英国に引きずり込まれて戦ったのだから、二度とその過ちを繰り返すべきでない」と考えていた。もちろんタカ派の友人もいたし、「いまはまだ戦うべきではない」と、戦略的な意味からの反戦を唱える人もいたが、私のは戦争はどんなものでも悪だという絶対的反戦主義だった。ミュンヘン条約についても、無数の人が戦死するよりはヒトラーに譲歩するほうがいいという立場であった。

コロンビア大学の講義が始まると、教室の私の席順は、偶然に李君という中国人の隣だった。アルファベット順で、Lee が Keene のつぎだったからだが、その偶然が私を漢字の世界へと導くことになった。

李君に会う前から、漠然としたものではあったが、漢字との出会いはあった。ニューヨークの中華料理店の看板が、漢字で書かれていたからである。そのほかにも、少年時代の私は父の勧めで切手を集めていたので、中国や日本の切手から漢字というものがあることは知っていた。もちろん読めはしなかったが、アルファベットとは本質的に異なるものだというていどの認識はあった。そして、その本質的な差が、私にとってはたまらない魅力だった。

現在でも、日本のローマ字論者の主張には、私は賛成できないものを感じる。個人的な立場からの不賛成だが、日本語や中国語がもし漢字という独特の字で書かれていなかったなら、私は最初から日本語なり中国語なりに関心を抱くことはなかっただろう。ハンガリー語やフィンランド

語は英語とは無関係であり、従って日本語と同様にエキゾチックなわけだが、少なくとも私は、なんの魅力も感じなかった。李君が買ってくれた筆と墨で中国語を教えられるままに書き、覚えるようになったのは、漢字にそれほどの魅力があったからである。表意文字のすばらしさは「一」と横棒を引いて one を表現すると聞いただけで、すでに相当の強さで感じられた。

その気持は、まるで新しい切手を一枚ずつ買い、わがアルバムに加えるときの楽しさに似ていた。珍しい切手を手に入れるように、私は一つ一つの漢字を私の語彙に加えていった。一つの漢字は、一つの新しい興奮であり、それは知識の地平線を一歩、先へと進めていった。とくに画数の多い漢字を覚えるのは楽しみだった。私は、自分が「歸」という字がはじめて書けるようになったときの感動を、いまも新鮮に覚えている。

百字覚えるころには、また別の興味が私の心をとらえた。それは、一つの漢字がさまざまな意味を持つということだった。たとえば、現代の中国語では「和」という字は「と(and)」を意味する。それを覚えたので、和平楼（だったと思う）という中華料理店へ行き、中国人の給仕に「この店の名は and という意味だろう」と聞くと、彼は言下に否定した。私は、そんな体験から、現代語と古典語の違いを知るようになった。

漢字の適当な教科書など、ない時代だった。たまたま友達が広東(カントン)語の小説を持っていたので、それをテキストに使った。李君は恥ずかしそうな顔をして「これは本当の中国語じゃないから、

覚えなくてもいい」と弁解した。広東語と北京語が、発音だけでなく字も違うことを、私ははじめて知った。

ところが、やがて日本語を知るようになると、中国語の何層倍も複雑なことがわかった。一つの漢字に、場合によっては十以上の発音と意味があるのである。それを知ったときの私の驚きを想像してほしい。

中国語は、原則として一字一音である。北京語と広東語を別の言葉とすれば、そう考えてもいい。しかし日本語は、たとえば「和」という一字に「ワ」「やわらぐ」「おだやか」「まぜる」「応える」などの読みがある。当時の私は、日本語は中国語よりはるかにむずかしいと思った。その信念は、現在もなお変らないのである。

中国語を勉強し始めた私は、級友たちから変人扱いをされ始めた。あまりにも漢字が面白いため、それまでのフランス文学やギリシア文学を中断してしまったのだから、なおさらだった。当時は大不況がまだ回復しきらず、中国語なら卒業後の就職は覚束なかった。それでもなお中国語に惹きつけられたのは、漢字の魅力もさることながら、やはり未知の世界に分け入る喜びがあったからであろう。

フランス語は中学のときから自由に読めていた私は、フロベールのどういう作品にはどんな意味があるかという講義を聞いても、それほど新味を感じなかった。それに反して中国語の場合は、

完全な terra incognita（未知の国）であった。西洋人がだれ一人として知らないような大文学作品がいくつもあるだろうとか、どんな西洋の作家よりも優れた中国の作家が何人もいるに違いない、まだ発見されないだけだとか、自由に空想することができた。

中国語をやり出したときの私は、さながら黄河の源流をたどりながら歩いていく探険家であった。あるいは、未知の海岸へ向かって漕ぎ出す大航海時代の船乗りのようだった。しかも、そのころのコロンビア大学の学部（アンダーグラジュエイト）には千六百人もの学生がいたのに、中国語をやっているのは私一人というのだから、楽しみはなおさらだった。私一人のために講座を提供してくれたコロンビア大学も、いい大学だったと言えよう。

フランス文学がべつに嫌いになったわけではなく、当時もいまも大好きである。だが、フランス文学に関するかぎりは「自分でやれる」という気がした。ギリシア文学のほうは、まだマスターしていなかったが、先生たちは旧弊で、どんな作品についても、作品そのものの面白さよりは文法上の珍しい点を指摘してやまなかった。与格（ディティブ）がどうの、対格（アキューザティブ）がどうのという話ばかりをしていた。それも知らねばならないのだろうが、作品の面白さ、詩の場合なら特定の一行の面白さについての説明が、もっとほしかった。どこがいいのか、なぜ詩の一行がそれほど有名なのかを教えてほしかったが、教室では文法ばかりだった。ギリシア語も、フランス語と同様、現在に至るまで大好きなのだが、文法上の穿鑿（せんさく）が講義を無味乾燥にしがちだったのにくらべると、さい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com